

典座教訓

觀音導利興聖寶林輝寺比丘道元撰す

佛家に本より六知事有り、共に佛子たり、同じく佛事を作す。

中就、典座の一職は、是れ衆僧の辨食を掌る。

『禪苑清規』に云く、「衆僧を供養す、故に典座有り」と。

古より道心の師僧、發心の高士、充て來るの職なり。

蓋し、一色の辨道に猶る歟。

若し道心なき者は徒らに辛苦を勞して、畢竟、益無し。

『禪苑清規』に云く、「須く道心を運らし時に随つて改變し、大衆をして受用安樂ならしむべし」と。

昔日瀉山、洞山等、之れを勤め、其餘の諸大祖師も、曾て經來れり。

所以に世俗の食厨子、及び饌夫等と同じからざる者か。

山僧、在宋の時、暇日、前資勤舊等に咨問するに、彼等聊か見聞を舉し、以て山僧が爲に説く。

此の説似は、古來有道の佛祖の遺す所の骨髓なり。

大抵、須く『禪苑清規』を熟見すべし。

然る後、須く勤舊子細の説を聞くべし。

所謂、當職は一日夜を経て、先ず齋時罷に、都寺、監寺等の邊に就て、翌日の齋粥の物料を打す。所謂、米菜等なり。

打得し了りて、之を護惜すること眼睛の如くせよ。

保寧の勇禪師曰く、「眼睛なる常住物を護惜せよ」と。

之を敬重すること御饌草料の如く、生物熟物、俱に此の意を存せよ。

次に諸知事、庫堂に在て商量すは、明日甚の味を喫し、甚の菜を喫し、甚の粥等を設くと。

『禪苑清規』に云く、「物料並に齋粥の味敷を打す如きは、竝に預先庫司知事と商量せよ」と。

所謂、知事には都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歲あり。

味敷を議定し了りて、方丈衆寮等に嚴淨牌を書呈せよ。

然る後、明朝の粥を設辨す。

米を淘り菜等を調べ、自らの手にて親しく見、精勤誠心にして作せ。

一念も疎怠緩慢にし、一事を管看し、一事をも管看すべからず。

功德海中に一滴も也た讓ること莫く、善根山上、一塵も亦た積む可きか。

『禪苑清規』に云く、「六味精せず、三徳給せずば、典座の衆に奉する所以に非ず」と。

先づ米を見て便ち砂を見る。先づ砂を見て便ち米を見る。

審細に看來り看去りて、放心すべからず。

自然に三徳圓滿し、六味俱に備る。

雪峰、洞山に在りて典座と作る。

一日、米を淘る次で、洞山問ふ。

「砂を淘り去りて米か、米を淘り去りて砂か」。

峰云く、「砂米一時に去る」。

洞山云く、「大衆、箇の什麼をか喫す」。

峰、盆を覆却す。

山云く、「子、佗後、別に人に見え去ること存らん」と。

上古有道の高士、手して自ら精し至り、之れを修すこと此の如し。

後來の晩進、之れを怠慢すべきや。

先來云ふ、「典座は絆を以て道心となす」と。

米砂誤りて淘り去ること有るが如きは、自ら手して檢點す。

『清規』に云く、「造食の時は須く親く自ら照顧し、自然に精潔となる」と。

其の淘米の白水を取り、亦た虚く棄ず。

古來、漉白水囊を置く。

粥米と水とを辨じ、鍋に納れ了り心を留めて護持し、老鼠等をして觸誤し、竝に諸色の閑人の見觸せしむること莫れ。

粥時の菜を調べ、次に今日齋時の所用の飯羹等を打併す。

盤桶、並に什物調度し、精誠淨潔に洗濯し、彼此、高處に安ずべきは高處に安じ、低處に安ずべきは低處に安ず。

高處は高平、低處は低平。

挾杓等の類、一切の物色、一等に打併し、眞心に物を鑑し、輕手に取放し、然る後に、明日の齋料を理會す。

先づ米裏に蟲有るを選び、綠豆、糠塵、砂石等、精誠に擇び了る。

米を擇び菜等を選ぶ時、行者諷經し竈公に回向す。

次に菜羹を擇び物料を調辨す。

庫司に隨て打得す所の物料は、多少を論ぜず、麤細を管せず、唯だ是れ精誠に辨備するのみ。

切に忌む、色を作し口に料物の多少を説くことを。

竟日通夜、物來りて心に在り、心歸して物に在り、一等に佗と精勤辨道す。

三更以前に明曉の事を管し、三更以來に做粥の事を管す。

當日、粥了りて、鍋を洗ひ飯を蒸し羹を調ふ。

齋米を浸すが如きは、典座、水架の邊を離るること莫れ。

明眼に親しく見て、一粒を費さず、如法に淘汰し、鍋に納れ火を燒き飯を蒸す。

古に云く、「飯を蒸す鍋頭を自頭となし、米を淘りて水は是れ身命と知る」と。

蒸し了りたる飯は便ち飯羅裏に收め、乃ち飯桶に收め、擡槃の上に安ず。

菜羹等を調辨すは、應に飯を蒸す時節に當るべし。

典座、親しく飯羹の調辨の處在を見、或は行者を使ひ、或は奴子を使ひ、或は火客を使ひ、什物を調へしむ。

近來の大寺院には飯頭、羹頭有り。

然れども是れ典座の使ふ所なり。

古き時は飯頭、羹頭等無く、典座が一管す。

凡そ物色を調辨するに、凡眼を以て觀る莫れ、凡情を以て念ふ莫れ。

一莖艸を拈じて、寶王刹を建て、一微塵に入て大法輪を轉ず。

所謂、縦ひ莆菜羹を作る時も、嫌厭輕忽の心を生ずべからず。

縦ひ頭乳羹を作る時も喜躍歡悅の心を生ずべからず。

既に耽著無し、何ぞ惡意有らん。

然あれば則ち、麤に向ふと雖も全く怠慢無く、細に逢ふと雖も彌よ精進有るべし。

切に物を遂ふて、心を變ずること莫れ。

人に順ひて詞を改むるは、是れ道人に非ず。

志を勵まして至心ならば、庶幾くは淨潔なること古人に勝り、審細なること先老を超えん。

其の運心道用の體は、古先、縦ひ三錢を得て莆菜羹を作るも、今吾れ同じく三錢を得て頭乳羹を作らん。此の事、爲し難し。

所以は何ん。今古殊異にして天地懸隔す。豈に肩を齊しくし得んや。然あれども審細に辨肯する時、古先を下視する理、定んで之れ有り。

此の理、必然ならば猶ほ未だ明了ならず、卒に思議紛飛して、其の野馬の如く、情念奔馳して林猿に同じき由なり。

若し彼の猿馬をして、一旦、退歩返照せしめば、自然に打成一片ならん。

是れ乃ち物の所轉を被り、能く其の物を轉ずる手段なり。

此の如く調和し淨潔にして、一眼兩眼を失すること勿れ。

一莖菜を拈じて丈六身と作し、。丈六身を請して一莖菜と作す。

神通及び變化、佛事及び利生する者なり。

已に調へ、調へ了りて已に辨じ、辨じ得て那邊を看し這邊に安ず。

鼓を鳴らし、鐘を鳴らし、衆に隨ひ參に隨ひ、朝暮請參し、一も虧闕無し。

這裏に却來し、直に須く目を閉じ、堂裏に幾員の單位、前資、勤舊、獨寮等幾ばくの僧、延壽、安老、寮暇等の僧、幾箇の人が有り、旦過に幾枚の雲水、菴裏に多少の皮袋ぞと諦觀すべし。

此の如く參じ來り參じ去りて、如し纖毫の疑猜有らば、他の堂司、及び諸寮の頭首、寮主、寮首座等に問ふべし。

疑を銷し來り、便ち商量す。

一粒米を喫すに、一粒米を添え、一粒米を分り得れば、却て兩箇の半粒米を得る。

三分四分、一半兩半、他の兩箇の半粒米を添ふ。便ち一箇の一粒米と成る。

又、九分を添え、剩り幾分かと見る。今、九分を收め、佗の幾分かを見る。

一粒の盧陵米を喫得し、便ち瀉山僧を見る。

一粒の盧陵米を添得し、又、水牯牛見る。

水牯牛、瀉山僧を喫し、瀉山僧、水牯牛を牧す。

吾れ量得すや、也た未だしや。爾、算得すや也た未だしや。

檢し來り點じ來りて、分明に分曉し、機に臨んで便ち説く。

人に對して即ち道ん、且つ恁の功夫、一如二如、二日三日、未だ暫く忘るべかざるなり。施主、院に入り財を捨し齋を設く、亦た當に諸知事、一等に商量すべし。

是れ叢林の舊例なり。回物俵散は同じく共に商量し、權を侵し職を亂すことを得ざれ。

齋粥、如法に辨じ了らば、案上に安置し、典座、袈裟を搭け、坐具を展べ、先づ僧堂を望み、香を焚き九拜し、拜し了りて乃ち食を發す。

一日夜を経て齋粥を調辨し、虚しく光陰を度ること無かれ。

實有らば排備し、舉動施爲、自ら聖胎長養の業と成らん。

退歩翻身せば、便ち是れ大衆安樂の道なり。

而るに今、我が日本國、佛法の名字聞き來ること己に久し。

然れども僧食如法作の言、先人記せず、先徳教へず。

況んや僧食九拜の禮、未だ夢にも見ることに在らず。

國人謂く、「僧食の事、僧家作食法の事、宛かも禽獸のごとし」と。

食法、實に憐を生ず可し、實に悲を生ず可し、如何んぞや。

山僧、天童に在りし時、本府の用典座、職に充てり。

予、因みに齋罷、東廊を過ぎ、超然齋の路に赴く次で、典座、佛殿の前に在りて苔を晒す。

手に竹杖を携へ、頭に片笠無し。

天日熱し、地輒熱す。

汗流し徘徊し、力を勵めて苔を晒す。

稍や苦辛を見る。

背骨は弓の如く、龐眉は鶴に似たり。

山僧、近づき前み、便ち典座の法壽を問ふ。

座云く、「六十八歳」。

山僧云く、「如何が行者人工を使はざる」。

座云く、「佗は是れ吾にあらず」。

山僧云く、「老人家、如法なり。天日且つ恁く熱す。如何が恁く地せん」。

座云く、「更に何れの時をか待たん」。

山僧更ち休す。

廊を歩す脚下、潜かに此の職の機要たることを覺ゆ。

又、嘉定十六年癸未五月中、慶元の舶裏に在り。

倭使頭と説話の次で、一老僧來る有り、年は六十許歳。

一直に便ち舶裏に到り、和客に問ひ倭榼を討ね買ふ。

山僧、佗を請し茶を喫す。

佗の所在を問へば、便ち是れ阿育王山の典座なり。

佗云く、「吾は是れ西蜀の人なり。郷を離れ四十年を得、今年、是れ六十一歳。向來、粗ぼ諸方の叢林を歴し、先年、孤雲裏に權住す。育王を討ね得て掛搭し、胡亂に過ぐ。然るに去年、解夏了りて、本寺の典座に充らる。明日五日、一供渾て好喫する無し、麵汁を做らんと要するに未だ榼の在るに有らず。仍て特特として來り、榼を討ねて買ひ、十方の雲衲に供養せんとす」。

山僧、佗に問ふ、「幾時か彼を離る」。

座云く、「齋了なり」。

山僧云く、「育王は這裏を去りて多少の路か有る」。

座云く、「三十四五里」。

山僧云く、「幾くの時にか寺裏に廻へり去るや」。

座云く、「如今、榼を買ひ了らば便ち行かん」。

山僧云く、「今日、期せず相ひ會ふ、且らく舶裏に在り説話せん。豈に好き結縁に非らざんや、道元、典座禪師を供養せん」。

座云く、「不可なり、明日の供養、吾れ若し管せずば便ち不是に了ぜん」。

山僧云く、「寺裏に同事の者、齋粥を理會す者無きや。典座一位、不在なりとも什麼の欠闕か有らん」。

座云く、「吾れ老年に此の職を掌る。乃ち毫及の辨道なり。何を以てか佗に譲る可きや。又來る時、未だ一夜宿の暇を請はず」。

山僧、又、典座に問ふ。「座、尊年、何ぞ坐禪辨道し古人の話頭を看せず、煩らしく典座に充り、只管に作務すや。甚の好事か有らん」。

座、大笑し云く、「外国の好人、未だ辨道を了得せず、未だ文字を知得し在らざる」。

山僧、佗の恁地の話を聞き、忽然として慚を發し驚心す。

便ち佗に問ふ、「如何なるか是れ文字、如何なるか是れ辨道」。

座云く、「若し問處を蹉過せざれば、豈に其の人に非らざんや」。

山僧、當時、會せず。

座云く、「若し未だ了得せざれば、佗時後日、育王山に到りて、一番、文字の道理を商量し去ることぞらん」。

恁地に話りを了へて、便ち起たちて座云く、「日晏れん忙ぎ去らん」と。便ち歸り去るなり。

同年七月、山僧、天童に掛錫す。

時に彼の典座、來て相見し得て云く、「解夏了りて典座を退し、歸郷し去る。適たまたま兄弟が老子箇裏に在りと説くを聞く。如何が來て相見せざらんか」。

山僧、喜踊し感激し、佗を接して説話の次で、前日の舶裏に在りて文字辨道の因縁を説き出だす。

典座云く、「文字を學ぶ者は文字の故を知らんが爲なり。辨道を務むる者は辨道の故を肯はんことを要す」。

山僧、佗に問ふ、「如何が是れ文字」。

座云く、「一二三四五」。

又問ふ、「如何が是れ辨道」。

座云く、「徧界、曾て藏さず」。

其餘の説話、多般有りと雖も、今、録さざる所なり。

山僧、聊か文字を知り、辨道を了るは乃ち彼の典座の大恩なり。

向來一段の事、先師全明全公に説似す。公、甚だ隨喜するのみ。

山僧、後に、雪竇の頌有り、僧に示して云く、「一字七字三五字、萬像窮め來り據を爲さず、夜深け月白く滄溟の下、驪珠を搜し得て多許か有る」を看る。

前年、彼の典座の云ふ所と、今日雪竇の示す所と、自ら相ひ符合す。

彌よ彼の典座、是れ眞の道人なるを知る。

然れば則ち、從來、看る所の文字、是れ一二三四五なり、今日、看る所の文字、亦た六七八九十なり。

後來の兄弟、這頭より那頭を看し、那頭より這頭を看る。

恁の功夫を作せば、便ち文字上、一味禪を了得し去らん。

若し是の如くならずんば、諸方五味禪の毒を被りて、僧食を排辨し、未だ好手を得ること能はず。

誠に夫れ當職先聞現證、眼に在り耳に在り、文字有り、道理有り。正のと謂ふべきか。縦ひ粥飯頭の名を忝けなうせば、心術も亦、之に同すべきなり。

『禪苑清規』に云く、「二時の粥飯、理すること合に精豊なるべし。四事に供し、須く闕少せしむること無かれ。世尊二千年（別本・二十年）の遺恩、兒孫を蓋覆し、白毫光一分の功德、受用不盡」と。

然あれば則ち「但だ衆に奉するを知りて、貧を憂ふべからず。若し有限の心無くんば、自ら無窮の福有らん」と。

蓋し是れ衆に供する住持の心術なり。

供養の物色を調辨するの術、物の細を論ぜず、物の麤を論ぜず。

深く眞實の心、敬重の心を生ずるを詮要と爲す。

見ずや、漿水の一鉢、也た十號を供して、自ら老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果、也た一寺を捨す。

能く育王最後の大善根を萌ぎざし、記を授かり大果を感じり。

佛の縁と雖も、多虚は少實に如しかず、是れ人の行なり。

所謂、醍醐味を調ふるも、未だ必ずしも上となさず。

莆菜羹を調ふるも、未だ必ずしも下となさず。

莆菜を捧げ、莆菜を擇ぶ時、眞心、誠心、浄潔心にして、醍醐味に準ずべし。

所以は何ん。佛法清浄の大海衆に朝宗の時、醍醐味を見ず、莆菜味を存せず、唯だ一大海の味のみ。

況んや復た道芽を長じ、聖胎を養ふ事は醍醐と莆菜と一如にして二如無きをや。

「比丘の口、竈の如し」の先言あり、知らずんばあるべからず。

想ふべし、莆菜能く聖胎を養ひ、能く道芽を長ずることを。

賤と爲すべからず、輕と爲すべからず、人天の導師、莆菜の化益を爲すべきものなり。

又た衆僧の得失を見るべからず、衆僧の老少を顧るべからず。

自、猶ほ自の落處を知らず、佗、爭か佗の落處を識ることを得んや。

自の非を以て佗の非と爲す、豈に誤まらざんや。

耆年、晚進、其の形、異なりと雖も、有智も愚蒙も、僧寶是れ同じ。
亦た昨の非は今は是、聖凡誰か知らん。

『禪苑清規』に云く、「僧は凡聖と無く、十方に通會す」と。

若し一切、是非有るも、之を管すること莫れ。

志氣那ぞ直に無上菩提に趣く道業に非ざらんや。

如し向來の一步を錯らば、便ち對面して蹉過せん。

古人の骨髓、全く恁のごときの功夫を作す處に在り。

後代、當職を掌るの兄弟も、亦た恁のごときの功夫を作して始めて得ん。

百丈高祖の規繩、豈に虚然ならんや。

山僧、歸國より以降、建仁に錫を駐むること一兩三年。

彼の寺、ひに此の職を置くも、唯だ名字有りて、全く人の實無し。

未だ是れ佛事を識らず。豈に敢て道を辨肯せんや。

眞に憐憫すべし。

其の人に遇はずして虚しく光陰を度り、浪りに道業を破らん。

曾て彼の寺、此の職の僧を見るに、二時の齋粥に都て事を管せず。

一の無頭腦、無人情の奴子を帶して、一切大小の事、總て佗に説向す。

正を作し得るも、不正を作し得るも、未だ曾て去りて看せず。

隣家に婦女有るが如くに相ひ似たり。

若し去りて見ることを得ば、佗、乃ち恥とし、乃ち瑕とす。

一局を結構して、或は偃臥し、或は談笑し、或は看經し、或は念誦す。

日久しく月深かけれど鍋邊に到らず。

況や什物を買索め、味數を諦觀せん。

豈に其の事を存せんや。何に況んや兩節の九拜、未だ夢にも見ざる在り。

時至りて童行を教ふるに、也た未だ曾て知らず。憐むべし悲むべし。

無道心の人、未だ曾て有道德の輩に遇見せず。

寶山に入ると雖も、空手にして歸す。

寶海に到ると雖も、空身にして還る。

應に知るべし、佗、未だ發心せずと雖も、若し一の本分人に見まみえば、則ち其の道を行
得せん。

未だ一の本分人に見えずと雖も、若し是れ深く發心せば、則ち其の道を行膺せん。既に兩闕を以て、何を以てか一益あらん。

大宋國の諸山諸寺に知事、頭首の職に居るの族を見るが如きは、一年の精勤を爲すと雖も、各三般の住持を存し、時とともに之を營み、縁を競ひ之を勵ます。

已に他を利するが如く、兼て自利を豊かにし、叢席を一興し、高格を一新す。

肩を齊しうし、頭を競ひ踵を繼ぎ、蹤を重んず。

是に於て應に詳かにすべし、自を見ること佗の如くなる癡人有り。

佗を顧ること自の如くなる君子有り。

古人云く、「三分の光陰二早く過ぐ、靈臺一點も揩磨せず。生を貪り日を逐うて區區として去る。喚べども頭を回さず爭奈何せん」と。

須く知るべし、未だ知識に見えず、人情に奪はるることを。

憐れむべし、愚子、長者所傳の家財を運び出し、徒らに佗人面前に塵糞を作す。

今、乃ち然あるべからずや。

嘗て當職前來の有道を觀るに、其の掌、其の徳、自ら符かなふ。

大瀧の悟道は典座の時なり。洞山の麻三斤は亦た典座の時なり。

若し事を貴ぶべき者は、悟道の事を貴ぶべし。

若し事を貴ぶべき者は、悟道の時を貴ぶべし。

事を慕ひ道を耽しむの跡、砂を握りて寶と爲す、猶ほ其の驗しるし有り。

形を模して禮を作す、屢しばしば其の感を見る。

何に況んや其の職、是れ同じ、其の稱、是れ一ならん。

其の情、其の業、若し傳ふべき者ならば、其の美、其の道、豈に來らざんや。

凡そ諸の知事、頭首、及び當職、作事作務の時節、喜心、老心、大心を保持すべきものなり。

所謂、喜心とは、喜悅の心なり。

想ふべし我れ若し天上に生ぜば、樂みに著して間ひま無し。

發心すべからず。修行未だ便ならざるに。

何に況んや三寶供養の食を作るべけんや。

萬法の中に最尊に貴なるは三寶なり、最上の勝なるは三寶なり。

天帝も喩ふるに非らず、輪王も比せず。

『清規』に云く、「世間の尊貴、物外の優間、清淨無爲なるは衆僧を最と爲す」と。
今、吾れ幸に人間に生れ、此の三寶受用の食を作ること、豈に大因縁に非ざらんや。
尤も以て悦喜すべき者なり。

又、想ふべし、我れ若し地獄、餓鬼、畜生、修羅等の趣に生れ、又、自餘の八難處に生れば、僧力の覆身を求むこと有りと雖も、手自ら供養三寶の淨食を作るべからず。

其の苦器に依りて苦を受け、身心を縛すなり。

今生、既に之を作る。悦ぶべき生なり、悦ぶべき身なり。

曠大劫の良縁なり。朽つべからざる功德なり。

願くは萬生千生を以て、一日一時に攝し、之を辨ずべく、之を作るべし。

能く千萬生の身を良縁に結ばしめんが爲なり。

此の如き觀達かんたつの心、乃ち喜心なり。

誠に夫れ、縦ひ轉輪聖王の身を作すとも、三寶を供養する食を作るに非ざる者は、終に其の益無し。

唯だ是れ水沫泡燄の質なり。

所謂、老心は、父母の心なり。

譬へば父母の一子を念ふがごとく、三寶を存念すること一子を念ふが如し。

貧者、窮者、強ちに一子を愛育す。

其の志、如何。外人識らず。

父と作り母と作りて方に之れを識るなり。

自身の貧富を顧ず、偏に吾が子の長大なることを念ず。

自らの寒きを顧ず、自らの熱きを顧ず、子を陰ひ、子を覆ふ。

以て親念切切の至りと爲す。

其の心を發す人、能く之を識り。其の心に慣ふ人、方に之を覺さとする者なり。

然らば乃ち水を見、穀を見るに、皆、子を養ふの慈懇を存すべき者か。

大師釋尊、猶ほ二千年（別本・二十年）の佛壽を分ちて、末世の吾等を陰ふ。

其の意、如何。唯だ父母の心を垂れるのみ。

如來、全く果を求むべからず、亦た富を求むべからず。

所謂、大心とは、其の心を大山にし、其の心を大海にす。

偏すること無く、黨すること無き心なり。

兩を提て、輕ろしと爲さず、釣を扛あげて、重しとすべからず。

春聲に引かれて、春澤に游ばず。

秋色を見ると雖も、更に秋心無し。

四運を一景に競ひ、銖兩を一目に視る。

是の一節に於て、大の字を書すべし。大の字を知るべし。大の字を學すべし。夾山の典座、若し大字を學せずば、不覺の一笑、大原を度すこと莫からん。

大滙禪師、大字を書せずんば、一莖柴を取りて、三吹すべからず。

洞山和尚、大字を知らずんば、三斤麻を拈じ、一僧に示すこと莫らん。

應に知るべし、向來の大善知識は俱に是れ百艸頭上、大字を學し來る。

今、乃ち自在に大聲を作し、大義を説き、大事を了し、大人に接す。

者箇一段の大事因縁を成就するものなり。

住持、知事、頭首、雲衲、阿誰たれか此の三種の心を忘却するものならんや。

于時嘉禎三丁酉春 記示後來學道之君子（云）。

觀音導利興聖寶林禪寺住持傳法沙門道元記。